



どろいやる2

水都の乙女たち

小説 葉原鉄 挿絵 かん奈



登場人物紹介

Characters



シャリー・マルクス

海洋都市国家・シルレアの保安騎士団に所属する女騎士。おっとりした天然トラブルメーカーで、街のちょっとした名物になっている。



カレン

保安騎士団所属、幼い少女の姿をした暗殺者。シャリーには忠誠を誓っているが、敵対者には痛烈な皮肉を振るう毒舌ロリ。



ヘルダ
(ドラグヘルダ・
パシュマル・チューバス)

チューバス王国第三女王。高飛車ながら憎めない性格のお姫様。あどけなさの残る童顔で巨乳。



カクたん／ルオ

東方玄龍角端尤尾を統べる龍王。見た目は幼い少女ながらその実永き時を生きながらえてきた。



ノア

チューバス王国聖教会所属の武装神官。無口で感情を顔に表さないが、情に脆い恥ずかしがり屋のシスター。ド近眼。



ルード

ヘルダに仕える元黒竜の少年。

序章	碧竜王シルレア	008
第一章	常夏の修道院	021
第二章	陽射しの下で幼肛甘露	066
第三章	水都の美女二段重ね	118
第四章	五人の美女と陽射しの下で	177
終章	はるかな北の空へ	248

これまでのあらすじ

ルードは峻厳な山脈の奥深くで暮らす若き黒竜。武装神官・ノアに破れ、人化した彼を待ち受けていたのは——チューバス王国の美しき王女・ヘルダに よって薬効満点の体液（≡精液）を絞り取られる日々だった!! 鬱々とする

ルードだったが、東方からの食客・カクたんとの出会い やノアとの初体験を経て、次第に運命を受け入れ、純粋 に人間の女性との交わりを愉しむようになっていく。や がて、病の癒えたヘルダと共に歩むことを決心し たルード。目指すはチューバス王国開祖が切望し ながら為し得なかった大陸制覇!!

「せっかく健康になったんだもの、港のひとつくらい領地に欲しいわ」

そんなこんなで一行は観光気分全開に海洋 都市国家・シルレアの偵察に向かう——。

雌の声と雌の匂いに獣欲が掻きたてられ、男の証が痛いほど腫れあがる。

「くっ……ヘルダ様が元気だったら、めちゃくちやに感じさせてあげるのに……！」

腋をしゃぶりまわしてヘルダの鼻息の乱れを聞きながら、もどかしさに舌打ちをする。悦楽に狂わせている間こそが、姫君を我が物としている実感がもつとも強い。シンの顔を脳裏から打ち消すためにも、もつともつと姦淫を尽くしたかった。

ヘルダの体調を壊してまでするべきだろうかと逡巡する。

あと一步の踏み込みができず、ただただチュクチュクと音を立てて唾液を擦りこんだ。竜の体液に含まれる薬効で、ヘルダの肌がいつそう艶やかに色づいていく。

「……あ、そっか」

少年の険しい目元がふつと緩んだ。

「簡単なことじゃないか、薬を出せばいいのか……ふふ、そうかそうか」

目元に続いて口元も緩む。元を辿ればルドがエンダンの大洞穴から人里に連れてこられたのも、姫君に神秘の生命力に満ちたドラゴンの体液を献上し、不治の病を癒すためであった。

「そうと決まれば……ご自分のためだから、薬を出すのに協力してもらいますよ」

すっかりこの快楽の虜とりになったものだと内心で苦笑いをする一方、中性的な顔には期待に満ちた歓喜の表情が浮かんでしまう。つまるところ雄というのは、雌との交わりが好きで好きで仕方ないのだろう。

胸を弾ませ、ズボンの帯を緩める。

「ほら、ヘルダ様の大好きなモノです」

赤銅色の隆起が空気を裂くように尖り立ち、ヘルダの二の腕にぺたりと貼りついた。少女らしい柔らかな肉感ときめ細かな美膚が赤々と膨れた亀頭と擦れあい、心地よい痺れをもたらしてくれる。

「ふう……」

喘いだのはふたり同時。姫君は意識の混濁に見舞われながら、腰をよじらせ喜悅する。彼女の中の雌もすつかり雄との交わりの虜になっている。

ルードは肉棒の裏筋を腕から肩へと這わせ、唾液まみれの腋に挟んでみた。膣や口や乳房とも違う新鮮な感触に嘆息し、腰をゆつくりと揺する。

「はっ、ああ……んっ、んふっ、はうん……」

ヘルダの吐息が断続的にはあるが、はつきりと声をとめないだした。こそばゆげな身じろぎのたびにベッドがきしむが、部屋の外に聞こえるほどではない。

だれかに聞かれたとしても、ふわふわの腋肉に包まれてツルツルの肌で摩擦される快感は手放しがたい。

もつと女の柔らかさを愉しむため、まずは胸の白い肌着を下にずらす。すこし引っかかった分だけ、剥けた瞬間すさまじい反動で乳房が弾んだ。水着とエプロンドレスで段階的に日焼け跡がついた媚膚が、ひととき新鮮やかな淡紅色に尖り立つ小粒が、残像を描いて

若々しい躍動感をアピールする。

「おっぱいは最初から元気なんですね」

ぷるんっ、ぷるん、ぷるん、ぷるん……。

汗で艶めいた肌の下にどれほどの弾性が秘められているのか、震えはなかなか止まらない。動きを止めるために驚づかみにしてみれば、ふくよかな肉感にどこまでも手を飲みこまれていく。

柔らかいだけでなく、一握りで爆ぜそうなほど張りつめた乳膚は揉み心地も抜群。手を離せばすぐに上品さをギリギリで保った美麗な丸みが再生する。ルードは揉んでは離しをくり返した。

やはりヘルダの身体は最高だ。何度味わっても飽きがこない。飾り気の少ない庶民服も新鮮な気分を与えてくれる。

「んう……あつ、はんっ、あんっ、あぁッ」

「可愛い声だなあ……いつもこれぐらい可愛げがあればいいのに」

脆弱な人間でありながら黒竜を頭ごなしに命令してくる人間への、ささいな不満。それすら今は火に注ぐ油となつて快感を増長させる。

ヌメヌメの腋で逸物が火葉じみた愉悦を孕み、じつと膨脹した。

「ガマンせずに出しますからね」

本当はもつとじっくり愉しみたいところだが、今は薬を飲ませて元気になつてもらおうの

が先決だ。なにせ性に関する行為はことごとく体力を必要とする。

腰遣いを加速させればヘルダの身悶えも大きくなった。手の中の白い肉玉も過敏に尖った乳首を擦りつけるように暴れまわる。

「ひんっ、あっ、ふああ、ルードお……」

うわごとのように名を呼ばれたのが最後の一押しとなる。

ピリツと尿道に電流が走り、睾丸がグツと持ちあがった。

「よし、イク……！ 飲んでください、ヘルダ様！」

逸物を襲う愉悦の痺れに逆らうことなく、鈴口をぱっくりと開いた。ヘルダの口に親指を突っこみ、無理やり大口を開かせながら。

びゅぐんッ、びゅるるうー！ びゅっ、ぶばっ、ぶばッ！ びゅぶうーッ！

「ふああ……！」

ルードの肉欲は稲妻のように宙を飛び、白い汚泥となって王族の高貴な相貌を侵犯する。閉ざされたまぶたもまっすぐの鼻梁も、姫君自慢のつるんとした額も、この日一発目の絶頂汁は見境なしに汚していく。

若々しく張りのある美肌であっても、熱したチーズさながらの濃い粘液を水気のように弾くことはできない。べたり、ねとり、と粘着されて、卑猥な芳香に包まれていく。

「あっ、はあ……」

ヘルダが心地よさそうに表情を緩める。かつて不治の病を癒し、いずれ自分を孕ませる

であろう子種の塊が愛しくて仕方ないというように。

「精子がすごく似合いますよ、ヘルダ様！」

白濁を振りまくごとにシンの顔が頭から消えていく。従僕にあるまじき行いに血肉が沸きたって、燃えたつような快感に海綿体が脈動しつづける。

ルードは確信を抱くことができた。ヘルダは間違いなく自分だけのものだ。

口内までしつかり汚濁が埋め尽くしていくのを、充実感とともに見守る。

「さあ、お薬ですからしつかり飲んでください」

「んぷつ、ふあ……」

ヘルダの喉がコクンと動くのを目で確かめ、腋擦りを止めて荒波のような絶頂感がゆつくりと引いていくのを待つ。多少不満を残したほうが、二回目は気持ちいい。

今度は姫君の胎内まで味わうため、体勢を入れ替えようとした。

「あの……ルード様」

問いかけてくるのは、いつの間にかドアの前に立っている白い尼僧衣。いまだに濡れたまま乾いておらず、量感たっぷりの熟乳がうつすら透けていた。

「あー、ノアいたんだ」

シスターノアは細頸をコクンと下げた。外見で言えば彼女のほうがルードやノアよりも年上なのに、その仕種には可愛げすら感じられる。

独占欲が燃えあがる。ヘルダ同様、だれにも渡したくない。彼女は初めて自分を一人前

の雄にしてくれたばかりか、慈悲の心で忠誠を誓ってくれた唯一の従僕でもある。

「ノア、こつちへおいで」

「ですが……ここは修道院ですから……」

扇情的な肢体をしていながら、表情の乏しさは相変わらず。冷静沈着な面立ちだからこそ、頬を染めるかすかな恥じらいが映えるのだろう。

「いいから、ぼくを満足させてくれよ」

「あっ」

腕を引いてベッドに手をつかせると、ノアはヘルダの顔に貼りついた汚汁の青臭さを間近に嗅いで、とつさに息を飲んだ。あるいはツバを飲んだのか。

その表情をじつと見ていたい気もしたが、ルードはすぐに彼女の背後に回った。

「お、お許しを……ここは修道院です。淫らな行いは許されません」

「嫌なら拒絶してもかまわない」

彼女が逆らえないことを知ったうえでの意地悪な言い方だと、ルードも自覚はしている。それでも今は、彼女の身体の奥深くをしつかり味わって、自分のものであるという確信を得たかった。

すがりつくように動き出した手で、ショーツとガーターストッキングの跡が浮かんだ尻をがつつりつかむ。ノアのような大人の女とヘルダやルオのような若い女との違いは、なんとと言っても尻にある。横の広がりが大きく、揉みこんだときの手応えは段違いに肉厚。

繊細で壊れそうな少女もいいが、ノアの肉づきには攻撃的な肉欲を誘発されてやまない。

「ああん、くう……!!」

感度のほうも大したもので、モチモチした尻たぶを手の平で押し潰しただけで、濡れて冷えていた肌がじんわりと発熱する。

「熱くなってるけど、本当にやめていいの?」

もにゅもにゅと柔肉をこねまわして、反応を確かめた。

「こ、ここは神の御許……姦淫は禁じられています」

「ふうん、じゃあお尻はやめよう」

太股を撫でるように手を降ろしていくと、その場ですぐに熱がこもりだす。

「あっ、ひああ、脚もお許しください……!!」

彼女の身体もヘルダと同じで、ルードと交わる悦びをとつくに知っている。内股の際どい部分を撫でてやると、彼女の履いているブーツが震えながら床板を小さく打ち鳴らす。

「そ、そこは……」

「どこが、なに?」

あえてそのまま股ぐらを狙わずに外股へ戻る。はぁ……と、彼女が安堵とも落胆ともつかない息を漏らすのを、ルードは待っていた。

「よいしょっと」

ひと繋ぎの尼僧衣を一息でまくりあげた。裾が破れても構わず、白のショーツとガーター

ーストッキングに彩られた特大の桃尻を暴き立てる。

「二度目のほうがよく出ること、ノアは知ってるよね？」

言葉になるような答えはないが、シヨーツをずらして髪と同じ色のきらびやかな茂みが露わになると、鬢重ねの媚唇が恥じらうように震えていた。生娘のような薄紅色の粘膜がなんとも初々しい。それでいてずらしたシヨーツが深々と食いこむほど熟した肉づきをしているのだから、少女と熟女のいいとこどりとといった風情だ。

「答えてよ。たくさん出るんだけど、ノアはどうしてほしい？」

彼女の尻と腿を撫でまわして粘っこい汗を塗り伸ばすと、吸いつくような感触で手が離せなくなる。肌が男をほしがっているのだとルードは解釈した。

尻たぶを左右に引つ張つてみたら、陰唇までぱっくり開いて内側のヌメつきが露わになる。水気たつぷりに光沢を帯び、鬢肉がウネウネと蠕動している。

「んうっ、ああ……開かないでください……」

慎ましやかに首を振る仕種も清楚で寡黙な尼僧らしい。彼女の恥じ入る肉色の秘穴へと、ルードは焼き鏝ゴキのように熱した龟头を不意打ちで押し当てた。

「……………ッ！」

「お、甘噛みしてきた。そんなに子種がほしい？」

膣口が食肉花のようにパクパクと開閉し、馴染みの肉棒をしゃぶりこもうとする。どろりとこぼれる膣ヨダレは卵白のようにトロついていて、清楚で寡黙な聖女の印象とは裏

腹に、彼女の秘裂は男のを咀嚼したくてウズウズしている。

「神に声が聞こえないようガマンするんだぞ」

腰を押し出し、温かくぬめついた洞穴に頭だけ挿入した。粘着感と熱感を兼ね備えた肉の環がキュツキュツと敏感なカリ笠を締めつけてくる。

「ッ……！！ んっ、うううう……！！」

指を囁んで声を殺すささやかな理性も、たまらず震えている背中も、連動して痙攣して海綿体をなめたくなる膣内感も、少年の肉欲をいつそう激しく燃えさせたせる。

「そら、そら、ちよつとずつ入ってくぞ。ノアの大好きな種付け棒だから奥まで差しこんでじっくり味わわせてやるから……な！」

半分まではゆっくりと挿入していたペニスを、一息に奥まで叩きこむ。濡れ肉の坩堝るっぼがぶぢゅぢゅツと淫声をあげ、愛しさを堪えきれないという風に絡みついてきた。それが根元まで隙なくルードを揉みこむ。

「おおお、気ツ持ちはいい……！！」

「んふううっ、んんううううううっ……んふあああッ」

ノアが弓なりに振り返って大口を開いたとき、ふいにドアがノックされた。

「シスターノア、お嬢さんの具合はいかがですか？」

ノアはとつさに自分の口を両手で塞ぐ。

鷹揚な修道尼の声にルードもさすがに危機感を覚えたが、ドアを見れば取っ手にホウキ

の柄が引つかけられていた。

「ノアがやったのか？」

耳元で囁いてみると、小さな首肯が返ってきた。

「……ん、くッ、さきほど、手を引かれたとき……とっさに」

「邪魔されなくなかったんだな」

見目麗しき尼僧の胎内が恥ずかしげに脈打つ。扉が開かぬよう細工をしたときの心情を慮ると、愛しさ以上にねじくれた嗜虐心がルードの中に湧出した。

腰を左右に揺らし、奥まで打ちこんだ肉杭で柔穴を拡張する。ぐ、うぐ、とくぐもった嗚咽が耳に心地よいので、さらに円運動で膣内を掻きまわした。

「んううう……！ んっ、んっ、くんうう……！」

「シスターノア、いかがなさいました？ ドアが開きませんよ？」

ノアはぐくりとツバを飲んで喉を湿らせる。贅肉からはペニスを乾かさないう愛液が漏れ出て、さらなるグラインドを誘っていた。

「も、申し訳ございません……んう、この方はさる高貴なる家柄のご令嬢、見知らぬ者に寝顔を見られることを嫌っておいでなのです」

「なるほど……年ごろの少女であれば他者の目も気になるものでしょうね」

ときおり下唇を噛んで声を押し殺すノアに、ルードはそつと囁いた。

「とっさに考えたにしては悪くない言い訳だな。ご褒美をあげるよ」

三回連続の激しい抽送で蠢きつばなしの秘裂を大胆に掻きまわす。

「ぐっ、くんッ、んはぁ！」

前後に揺らめく尼僧の顔は、寝こんだ姫君の顔を唇で擦りそうな位置にあつた。姫君が目を覚ませば、淫らに緩みきつた顔を晒してしまふ位置であつた。

「苦しんでおいでなのですか？ ベッドの上で暴れているのでは？」

「は、はい、発作です……ですが問題ありません、んっ」

ルードは悪いと思いつつも、三回の予定だった抽送を六回、さらに九回と重ねてしまつた。なにせノアの肉穴は具合がよい。入り口はひとたび啜えこんだ肉棒を逃すまいと窄まるし、折り重なつた肉のフリルはひとつ残らずカリ首に絡みついて激しい摩擦を求めてくる。つかみ心地たつぷりの臀部も腹で打つたび血色がよくなつて、言葉や態度よりも如実に感悦を訴えている。

「そうですか。もし手助けが必要ならいつでもおつしやいなさい」

「お心遣い感謝いたします、シスターマルガリータ」

足音が遠のいていくにつれ、びくん、ビクン、ビクンとノアの背筋が脈動を大にしていくな。同調して膣肉も痙攣していくタイミングを、ルードは逃さなかつた。ここぞとばかりに腰遣いを速めて膣内を摩擦し、加熱していく。

「興奮したんだな、イキそうなんだな！」

「あんうううう！ い、イジワルです、今日のルード様は……んくうっ！」

淫行の事実を他者に知られるかもしれない状況に、ノアの性感神経は火花を散らさんばかりに昂揚している。その火花をさらに大きくして尼僧の理性を焼き尽くすために、少年はひとときわ鋭く最奥を突いた。

「んううううー！」

「ぐう、きつつい……！」

ノアは汗と愛液を噴き出して、齒噛みのままに断末魔の嬌声をあげた。濡れそぼった蜜穴がギュッとこわばって収縮し、根元までぎっちり入った竿肉を強烈に圧搾する。

子種を搾り取ろうとする女ならではの不随意運動に、ルードはあえて従わない。

「まだだ、ぼくはまだイッてないぞ！」

がむしやらに腰を振りまわして、狭まった肉腔をポチユポチユとほじくり返す。

「ひあああつ、い、今、動かされたらあ……あんんうツ、はあああああ！」

オルガスムスに染まったノアの肉体はより過敏になってルードの横暴に翻弄される。尻や脇腹を撫でられれば膣壁の震えで応じ、乳肉を鷲づかみにされれば絶頂をくり返すようにのけ反り返る。

「あああーッ、ひうんッ！ くひいいい！」

降りることを許されない悦楽の高みで、ついには表情も泣き出しそうなとろけ顔に変化する。後ろのルードからはよく見えないが、目元のたるみ具合だけで見分けられる程度には彼女とは夜を共にしてきた。

「いい顔だ……ノア、イキっぱなしで苦しい？」

「あああん、苦しいけど、気持ちよくて、狂ってしまいそうです……！」

背に覆いかぶさり、乳肉の柔らかさを手で確かめながら腰を加速させる。結合が浅くなる角度なのにコツコツッと最奥に当たっていた。

子宮口が種付けしてほしくて、降りてきているらしい。

こんなにも強く求められて、雌を孕ませたくてたまらない少年がいつそう興奮しないはずがない。

「くうう、ノア！ ノア！」

膺へその下でヘドロのような流動感がどろりと生じるのを感じて、自分の限界が近いことを知る。最後の景気つけに、ノアの両手首を握りしめて自由を奪った。

「さあ、たつぷり出してやるから今日こそ孕むんだぞ！ ヘルダ様にも見てもらえ、修道院で種付けされるシスターの顔を！」

「んはあああッ、いやあ、姫様あ、起きないでください、あああんッ！」

両腕を手綱のように操って、ノアの姿勢を一気に傾斜させた。淫猥に歪んだ顔が火照りっぱなしのヘルダの寝顔に近づき、頬と頬がさきほどの白濁液でべちゃりと吸着する。後ろからの突きこみで身体が揺れれば、にちゅにちゅと粘音が鳴った。

突けば突くほどノアの顔に汚濁が伸びて広がっていく。鼻から忍びこんだ刺激臭が媚薬となつて、ざわめきの止まらない肉壺をひととき大きく震撼させた。



「す、すごい痙攣……！ ビクビクしてる！ ああつ、これはガマンできないよ！」

ルードは愉悦のあまり歯噛みをしていた。充血して何割か肥大化した肉棒に、同じく充血した柔髪が歯列のように食いこむのだから堪えられるはずがない。

この瞬間を待ち望んでいた。女の腹の中を我が物とする瞬間を。

ドクン、と腰が跳ね、全神経が股間に集中した。

「くううん……ああ、ほ、ほしいです……ルード様の種を授かりたいです、けどお……でも、今は、修道院では、ダメなのです……！」

「ダメなもんか！ イクぞ、もう出すぞ！」

「そ、そんなあ……んううう！」

最後に数回の抽送は助走のようなものだ。一往復ごとに亀頭がとろけ、バチツと火花を散らし、苦しげに蠢動――。

そして七往復で、力をこめて閉ざしていた尿道の根元と鈴口が弾け飛んだ。

「ぐっ！」

「ひくううッ、んあああああああーッ！」

しつかり最奥まで突きこんで、根元を膣口に締めつけてもらいながら、ルードは絶頂のエキスを解放した。

びゅぶんっ！ ぶびゅううー！ びゅくんっ、びゅるううッ！

人間の雄よりもはるかに大量で濃厚な精液が鋭敏な肉壁を殴りつけた。濃度が高いので

重みもあり、出しているほうは尿道が引きずり出されるような快感に酔いしれ、出されているほうも先ほどのまでの自制心を忘れて淫らに憂悶する。

「ひっ、あつ、ひいいんっ、イキながら、イッてますう……!」

心なしか恍惚とした表情で貪欲な魚のように口を開閉させる。いまだ寝たままのヘルダと唇が擦れあつていても、中出しの快感に取りこまれたまま王族への不敬を悔やむ余裕もない。

「ははっ、たまらないなあ、ノアのおま○こは……! ほら、もつと出る! まだだ、まだまだ出しまくってやる!」

精子を一滴残らず子宮の中に注ぎこむため、射精しながら腰をよじって白い尻肉が平たく潰れるほど圧迫した。イッている最中の龟头粘膜が擦れて脳が白熱する。

「どうだ、ノア。神の御許でも種付けされるのは気持ちいいだろ?」

「き、気持ち、いい……ルード様の種付け、素敵い……!」

とうとう言葉まで姦淫に墮落した。生真面目な尼僧を淫婦に変える悦びは、幾度の夜伽よとぎを経ても衰えることはない。

時間の経過を忘却して溶鉱炉のように発熱した性器を重ねたまま、どれほどの精を出したところか——ごぼりと結合部から白濁が溢れ出した。

「ああ……もつたいない……」

ノアがひそかにそう囁くのを、ルードは聞き逃さなかつた。

カレンが今度こそ懐に入れようとした手を、ルオがたやすく握りしめて真上へ持ちあげる。ヘルダもそれに倣って逆の手をつかみあげて少女を無力化した。

服の隙間から覗ける汗ばんだ腋がまた色つぽい。顔立ちだつてキツめながら整っているし、ツンケンした態度もベッドの上であればそれほど悪印象ではない。

「決めた、おまえも孕ませる！」

腰を軽くよじつて若い肉穴をほじくつてみると、カレンは懸命に歯を食いしばって不敵な笑みを浮かべてきた。

「で、できるものなら、んっ、やってみなさい……！ 私の胎はらは完成された腹壘！ 子どもなど孕めるはずがない！」

予想外の返答にルードの欲情は停滞した。

「たしかに腹壘であれば受精する間もなく子種が殺されようが——」

「そんな……それじゃあるオ、カレンは子を産むこともできないのか
全身が脱力していく。」

そのようなことがあつていいのかと、世を呪うように感じた。

「あなたの薄汚れた欲望の餌食にはなりません」

ほんのすこし誇らしげにカレンは鼻を鳴らす。

同じように、ルオもまた鼻を鳴らした。

「じゃが、旦那さまの体液は不治の病を癒す霊妙の秘薬。注ぎつづけければ腹壘の毒も消え

て子を産める身体に戻るやもしれぬぞ？」

ルードとカレンの表情が一変した。

絶望への悲嘆から希望への歡喜へ。

勝ち誇る瞳から戸惑いの眼差しへ。

「私が……子を産める？」

「あなた、もしかして本当はそれを望んでいたのではなくって？」

ヘルダの読みはおそらく当たっていたのだろう。カレンは目に見えて狼狽し、言葉を出すこともできずに首を左右に振っている。

「アマデオ・マルクプスの周辺については調査済みです。シャリー・マルクプスが子を授けからなかったことも、彼女があなたを我が子のように愛していることも、あなたがすこしずつ暗殺者らしくない顔をするようになってきたことも」

嘲笑うあざわらでもなく憐憫するでもなく、ヘルダは淡々と事実を述べて年下の妹をあやすように黒髪を撫でた。

「人間らしい生き方をしてみたいのなら、わたくしのルードを使ってお腹を治すのが一番じゃなくって？」

「だ、だれもそんなこと望んでません！」

「愛し愛され瑞々しく生きるのはステキなことじゃぞ？」

「愛情なんか生まれてこの方一度も見たことがない！」

涙ながらに強がりと言うカレンを見ていて、ルードはたまらなくなつた。

雄にとつて雌を孕ませることが最高の幸せであるなら、雌にとつては子を産むことが至上の幸福ではないか。その幸せを奪い取られた少女が冷たい顔をするようになるのも無理はない。

「それならばくが愛してやる！」

薄い背中を抱きしめて、いとおしさに頭を撫でまわす。

「愛情たつぷりに孕ませてやるからな！」

「バ、バカなこと言わないで！ そんな即物的な愛情は願ひさげです！」

「孕むまでそりやーもう毎日抱いてやるから安心してくれ！ 毒なんかにはくの精子が負けるもんか！ この薄いお腹、くの子どもで大きくしてやるから！」

身をよじられたのでいったん離れるが、やめるつもりは毛頭ない。愛情と雌の悦びをもつと彼女に教えてやりたいのだ。

「胸も愛してやるぞ。人間はここを使って赤子を育てるんだらう？」

上衣の合わせ目を掻き分けて薄い胸を暴き立てると、胸先の木苺が固くなつていた。食べごろのようなので、背を丸めてコリコリと甘噛みする。

「ひゃひっ」

精液の媚薬効果がどんどん回っているのか、ひと噛みで慎ましい膨らみがぼわりと桃色に染まつた。膣内もしつとりと熱をあげて、ただ締めつけるだけでなく強弱をつけた抱擁

でペニスを愛し始めている。毒液と精液の混じりあつた粘液は、双方にとって嘆息するほど心地よいぬかるみとなつていた。

ルードは彼女をいたわるようにゆっくり腰をねじり、毒の巣と化した子宮を亀頭でグリグリとマツサージした。

「ひッ、ああ、やめて……！ 優しくなんかしないでください……！」

すでに挑発的な響きはなく、耳朵を舐めるような愛らしい喘ぎだった。

「そうか、優しくされるのがいいんだな。ぼくだつて人間の気持ちぐらいわかるようになってきたんだ、安心してよがってくれ」

小さな胸と首まわりを撫でまわすと、カレンの目がモヤのような潤みを帯びていく。イヤイヤと首を振つて快楽を拒絶しようとしても、ルオとヘルダに手首を握られては自分の首を絞めることもできない。

「わたくしもこんな風に処女を奪われたんでしたわね……」

「あのときのへるだは可愛かつたのう……かれんももつともつと旦那さま好みに可愛くしてやろうぞ」

ルオは目の前で晒された腋に舌を近づけ、触れるか触れないかの距離でたくみに動きまわつた。逆の側ではヘルダも同様に。

「あつ、んっ、くすぐりたい……ひんう、いやあ……！」

薄い胸がよじれる様を見るかぎり、腋の神経も性感帯として発達しているらしい。もち

ろんそれは撫でれば撫でるほど熱くなつていく胸も同じこと。摘まれるたび上擦った吐息を引き出す乳首にしても、見た目の幼さからは考えられないほど感度がいい。

膣穴にいたつては蠕蟲ぜんちゅうの坩堝と化してウネウネと蠢動していた。華奢な肢体を乱暴に突きあげられても痛がるどころかいつそう激しく雄肉にむしやぶりつく。

「あん、はあつ、あんっ！ ああつ、あああつ、ああーッ」

「いいぞ、もつと感じるんだ。カレンの可愛いところをぼくに見せてくれ」

愛らしい東方の少女をただ孕ませるだけでは満足できそうにない。

もつと気持ちよくしてやりたいし、本物の愛情を通わせたい。

ルードは喘ぎつばなしで閉じられることのない唇を舐めた。かすかに首を傾けて避けようとするのを追つて、強引に舌を絡める。

「ひゃひつ、んおお、らめえ……キスひやあ……！」

「でも交尾しながらキスするのって気持ちいいだろ？」

逃すまいと口を窄めて舌を吸引し、口内で擦りまわす。

「そうね……キスをしているとトロトロになっちゃうもの」

「ほほ、見ているだけで股が疼きそうじゃ」

嫉妬と羨望を交えて、ルオとヘルダは腋舐めばかりかカレンの尻まで撫でまわした。白い小桃はさきほどの精液でスカートの裏地がべつたりと貼りついており、結合部に近いせいでひどく過敏化している。女性特有の柔らかな手つきで愛撫されて、つんざくような性



感刺激を背骨や膣内に響かせる。

「あううつ、熱い、暑い、あついいいい！」

閉めきつた部屋で汗まみれになって交わる四人の中心で、カレンはひとときわ赤くたって柔腰をキュンツキュンツと跳ねあげだした。

「イクのか？ そうかイクのか、ならばくもイクぞ！」

暑さを振り払うように抽送を加速させ、重なりよじれた壁構造を入り口から最奥までカリ首で味わう。ペニスに焼けるような痺れが溜まるにつれて、大きなストロークから小刻みなストロークへ。

「ああああつ、ああつ、あつ、ああつ、んううう！」

ぐう、と子宮口が龟头を押し返してくる。

精子を求めているのだろう。他ならぬ黒竜の少年の濃厚な子種を。

ぞわりぞわりと鳥肌の立つような感覚が下腹に蔓延する。東方の美少女の湿りきつた子宮へと、子種をたっぷり植えつきたいと訴えている。

「くううつ、出すぞ！ カレンを幸せにしてやる！」

もはや悪態のひとつもつけない可愛い口を舐めまわし、柔らかくなった小造りの肉輪を極太でめいっばい押し広げながら一番奥を突きまわす。

気を利かせたヘルダとルオが、カレンの太腿に手の平と体重を乗せた。腹の奥を穿つように肉槍が食いこみ、少女の目が見開かれる。

「ひいひいッ、イツ、イクうううううううう！」

ルードは舌をしやぶって彼女の体温を感じ、オルガスムスを同期させる。愛情たつぷりの悦楽汁が収縮する肉壺へと注ぎこまれた。

びゅうううっ、びゅぐんっ！ ぶびゅびゅっ、どびゅうううーっ！

ルードはそのまま腰を振りつづけた。自身の尿道が快感に焼けついても構うことはない。カリ首が膣口に引つかかるたび、ぶぱっ、ぶぱっ、と白濁が溢れた。

小粒の鬚々が充血して固くなり、ペニスが擦れるたび後追いの悦楽電流をまき散らす。

「もっと、もっと出す！ 絶対におまえを治してやる！ ぼくの子を産める身体になって、いい母親になるんだぞカレン！」

「あああーッ！ わ、私、お母さんになっちゃうう……！ 私、わたしい……！」
カレンは目と口を固く閉じた。

わななく子宮で精子の量と熱を味わいながら、びくん、びくん、と身震いする。

ふたたび目を開いたとき、そこには冷酷な暗殺者の面影は残っていないかった。

「わたし……本当に、ふつうの女みたいに生きられるの？」

「もちろんだ、ぼくが普通の女の子にしてやる！」

ふつとカレンの全身から拒絶の意志が抜けていく。

ついに運命を受け入れた少女にルードはひときわ強い愛情を感じ、抱きしめながらベッドに倒れこんだ。

「ほーれほれほれ、おねーさんのオツパイサービスマー」
腋から前に手を回して水着の下の乳首をキュツと搾る。

「ひんッ！」

「ちよつと痛いぐらい我慢してや？　ウチはノアちゃんを助けるために失業したんやからな」

「では、あなたが裏で手を回してくださいね。私のために……」

「心配せずともシャリーには今後チューバスでわたくしのために働いてもらいます。ふたりともここで親睦を深めておきなさい」

ヘルダはノアの尻へとオイルを塗り伸ばし、肉たぶをしつかり揉みしだいた。

シャリーも負けじと乳肉をこねまわす。

肌と肌が柔らかさを分かちあうように形を変えて、すこしずつ赤みを増していく。ノアは裸眼のせいかわやけにフラついていた。

「あ、あうう、このようなこと、ルード様の前で……」

「ルードならあんなに嬉しそうに顔をしているわよ？」

眼鏡を外したノアにはよく見えないだろうが、ヘルダの言う通りルードはニコニコと満面の笑みで三人の睦みあいを眺めていた。

柔肌が重なりあつてぬちよぬちよと蠢く様は実に目の保養になる。乳房が跡形もなくひしゃげたり、しなやかな脚線が絡みあうのがなんともいやらしい。

だからと言って、見ているだけで満足できるほど達観はしていない。

「よしぼくも交ざっちゃうぞー」

万歳しながら飛びこんでいくと、腹のど真ん中に鉛の塊のような重みがめりこんだ。衝撃が背中を抜けて汗が飛び散り、それを追うようにルードが宙に舞って長椅子の上に逆戻りする。

「あははー、調子乗ったらアカンよ」

シャリーは強烈な一発を放った拳を見せつけるように手を振った。

「シャ、シャリー殿！　なんてことをするのですか」

「ノアちゃんもヘルヤんもルード君に甘すぎやで？　旦那は馬やさかい飼いやと鞭でちゃんとしつけやーって言葉がシルレアにはあつてな」

「鞭ならわたくしいつも与えますわよ？　ルード、そこから動いてはダメよ」

金縛りに遭ったルードへと、薄ら笑いのシャリーとヘルダが迫ってくる。

「うへへー、あの夜はさんざん弄ばれてしもたからなー。シャリーさん人生はじまって以来の屈辱や。いくら許嫁やからって容赦せーへんよ」

「ふふ、わたくしが気持ちよくしてあげるから覚悟なさい、ルード」

「あ、あの……許嫁？」

ノアの声は小さすぎてふたりには届かない。

シャリーとヘルダは長椅子の左右に膝をつく、美女三人のオイル絡みを目撃していき

り立つた逸物に恨めしげな半眼を向ける。

「ぼく、もしかしてなにか悪いことした？」

いつもと違う成り行きにルードは戸惑い、つい弱気に訊ねてしまった。

恐ろしく冷たい笑顔で、ふたりは竿肉を握ってくる。

「あなたはいつても愚かしいわ。まるで獣ね、ルード」

「まさか角端の大伯母様までタラシこんでるとは思わなかったで。めっちゃ複雑な気分やわ……あの人、ウチのおかんより年上やのに」

ぐちゅり、ぬちゅりと握力をこめた手が上下する。オイルにまみれて粘着質で、ピリピリと甘い痺れが逸物にこみあげてくる一方で、なんとなく食肉花の餌食となった羽虫の人生に想いを馳せてしまう。

正直、カレンの襲撃よりずっと肝が冷える。あときはヘルダとルオが伏兵として潜んでいたが、この現状はあきらかに四面楚歌である。

「あの、あの、みなさま、許嫁というのは……」

出遅れたノアがすこし強引にシャリーの肩をつかんで問う。

「ウチのおかんの碧竜王シルレアがな、子ども同士つがいにさせよかーってルード君のおんと約束しよったわけよ」

ぎ、とノアの口元で歯を食いしばる音がした。

ほほ、とヘルダがあからさまに笑い、ペニスの裏筋に爪痕をつけてくる。

「わたくしがよしと言うまで射精してはダメよ。わたくしがあなたの主ですもの、命令は聞かざるをえないはずですね？」

主という一言にアクセントを置いた命令を受け、尿道がぐつと収縮した。カレンに根元を縛られたときと違って、力づくで解くことのできない絶対的な強制力である。

「ぐつ、そ、その命令はちよつとつらい」

「野放図に出しまくってたらお馬鹿さんになってしまわよ？」

何度も裏筋に爪を立てられ、刺すような痛悦にスマートな腰を引きつらせる。その間も根元付近のとくに硬い部分をシャリーが自慢の握力で握りしめてくるものだから、快感がどんどん高まっていく。

「いくら黒竜が一夫多妻の伝統やからってハーレム気分も大概にせな、そのうちだれかに刺されるかもしれない？」

睾丸まで揉みあげてくる手つきが巧みだからこそ、輸精管に見えない蓋をされた身には拷問のように感じられる。

「ちよ、ちよつと手を休めてくれ。落ちついたら大丈夫だから」

本当のところガマンせずは一発出してしまったかった。射精を禁じられているからこそ、なおのことその快感を欲してしまう。しかしどれだけ求めても得られないのなら、ひとまずその考えを切り離す時間がほしい。

「そんな暇は与えてあげません」

「ウチに不貞を働かせた罰や」

「マジですか」

人と童の姫君はオイルのぬめりを借りて手淫を加速させる。

ぐちゅり、ぼちゅり、ねちゅり、もちゅり――。

水音が奏でられるうち、鈴口が内側から殴られるような感覚に見舞われた。

「はっ、うう！」

ズキンッ！

寧丸から駆けぬけてくる愉悦が、鈴口に達することもなく差し止められた。鈍痛じみた衝撃が幾度となくペニスを打つ。

普段なら長々と濁液を吐き出しているのと同じだけ、射精寸前の高ぶりと愉悦が少年を苦悶させる。中性的な横顔はまるで弄ばれる少女のように弱々しげに歪んだ。

「あぐっ、くあああ……！！く、苦しい、苦しいから勘弁してくれ……！！」

「うふふふふ、わたくしがイキすぎて苦しいと言つてもやめてくれないでしょう？」

「ウチのお尻叩いたりもしたよな、ルード君？」

ヘルダとシャリーは意地悪い笑顔でいっそう手を速めた。

イクにイケない快樂地獄で、褐色の少年は暑さに出る汗とは違った粘度の高い脂汗にまみれていく。

「おふたりともそこまでにしてください」

ふたりの間を割って現れるのは、すこし強めに眉を寄せたノア。鋭い手つきでヘルダとシャリーの手首をつかみ、たくみに少年から引き剥がしたかと思えば、砂につまずいてルードの正面に膝をつく。

「きゃっ……ル、ルード様、おかわいそうに」

一瞬の安堵に見舞われた海綿体であつたが、すぐさま慈愛たつぷりの肉感でみっちりと密着包囲された。

「おおっ、ノアの胸え……！」

西瓜スイカのようにたわわな肉乳が逸物を包み、腹の上をゆつくり前後にスライドする。いくら妖術で隠されているとはいえ、何歩か離れた場所を普通に観光客が歩きまわっているというのに、羞恥心の強いノアがこんな行為を仕掛けてくるとは思いもしなかつた。

しかも胸遣いには臆するところが感じられない。オイルが満遍なく行き渡っているので潤滑も充分。強引な手コキと違って摩擦も圧迫もため息が出るほど優しい。柔胸がたわむたび紐状の水着からピンク色が覗けるのも、見とれてしまうほど扇情的。

「可哀想なルード様……さぞお苦しかったでしょう。こんなに腫れて、こんなに脈打つて。どうぞ私の胸に安住してください」

「ああ、すごく楽々でいい感じだ……」

鈴口を叩いていた射精欲もじわじわと尿道を痺れさせる微弱な快感に変わっていく。南国の日陰のように麗うららかで心地よい。ずっと味わっていたい。

「ああ、ルード様……もつと私の胸で気持ちよくなってください」

うっとり吐息を漏らすノア。

その左右から、計四つの柔玉が突如としてペニスに押し寄せてきた。

「漁夫の利やなあ、ノアちゃん」

「ルオたんの言っていた通りだわ。隙を見せるとすぐいいとこどりをするって」

シャリーとヘルダはノアの特大乳と押しあつて、形を崩しながら男根を奪いあつていく。ペニスはすっかり柔肌に埋め尽くされて見えなくなり、三倍になった量感で揉みくちやにされた。

「私はただルード様を苦しみから解放したいだけです」

「わたくしは色欲の権化を懲らしめているだけよ？」

「ウチは許嫁の舵取りしとるだけやで？」

三者三様の言い分をぶつけあいながら、乳肉は睦みあうように絡みあう。手とは違って骨のない肉の塊はどれだけ激しく動いても過剰な負担になることなく、マイルドな摩擦と圧迫でじわじわと性感を加熱していく。

「ふう、気持ちいい……これは定期的に味わいたいかも」

擦れれば擦れるほど乳房は赤みを帯びて、柔らかさも増していく。三人の息が乱れていくのも見ていて愉しい。ときどき水着が引っかかって痛みが走るが、そのたび肩紐がずれ赤い突端が見えてくるので視覚的には問題なし。

なによりも、潤滑油を帯びた乳肉で一分の隙もなく密着される感触は、膣内への挿入感にすこし似ている。海綿体がゾクゾクするような錯覚だった。どんなに優しい愛撫であっても、雄の本能に従って射精欲が根元に募っていく。

「まださっきの命令は撤回してくれませんか？」

「んっ、まだまだよ、ルード……ふう、このケダモノちんぽがもつともつと熱くなつて、あなたが悲鳴をあげるまで許しません」

ヘルダは両乳を手で持ちあげ降ろすをくり返して上下摩擦をくり返す。心なしか、今日の彼女は普段に輪をかけて威圧的だ。

「うふっ、あはっ、一回ぐらいゴメンナサイ言わせな、んくっ、ウチかて気が済まへんよ。この寝取りチンポめ、えいっ、えいっ」

シャリーは硬くなった乳首を擦りつけ、強い刺激を自身とペニスに与えていた。あるいはそれも、ささいな誤解から擦れ違っていた許嫁同士の時間を取り戻すためのスキンシップなのかもしれない。

「ああ……一週間ぶりの、ルード様のおちんぽ……」

ノアは碧眼を酩酊させて行為に没頭していく。最初は別の思惑があつたようだが、今では男らしい灼熱感に魅了されて、腰ごとよじつて乳膚を擦りつけていた。

三人の乳淫奉仕で、一度は収まりかけた鈴口へのノックがふたたび激化し始める。

「ぐっ、はうう、また来たあ……!!」

ビクンツ！

出すに出せない不満に腰が持ち上がり、鬱血の痛みに息が止まる。

桃色に蒼碧に黄金の髪は止まることなく揺れつづけた。

「もっと可愛らしい悲鳴をあげなさい、ルード。わたくしたちが主従の契約を結んだばかりのときみたいに……ほら、もっと、もっと！」

「ゴメンナサイはどないしたん？ ゴメンナサイ言うたらもつともつと気持ちよくなれるんやで？ 許嫁のオツパイもつと愉しみたくないん？」

「ああ、ルード様、ルード様、ルード様、ルード様、ルード様ルード様、ルード様ルード様ルード様ルード様ルード様……！」

圧倒されるほどの熱意でペニスを揉みこまれ、寸止めの射精運動と肉茎の鬱血が絶えることなく連続する。

血が溜まれば性感神経も過敏化するので、乳肉が擦れるたびペニスどころか脳を殴打されたような感覚すら湧きだす。もはや気持ちいいのか痛いのかもわからない。

ルードはビクビクツと全身を痙攣させながら、とうとう悲鳴をあげた。

「ご、ごめんなさい、ぼくが全部悪かったです！ お願いだから、もう出させてください！ このままじゃ爆発しちゃいますよお！」

裏声で喚き散らす姿は、まるで幼子のように頼りない。

それと同時に、初めて射精をさせられたときはこんな風だったなあと懐かしい気持ちも



味わっていた。

「よろしい……存分に出していいわよ、ルード」

慈悲のたつぷりこもった柔和な笑みで、解放が許可された。

「うくううッ！」

不可解な力で閉じていた鈴口がぱつくりと開き、赤銅の頭がぬりぬりゆと蠢きあう柔肉の坩堝から飛びだした。

その瞬間を狙い澄まして、三人はさらに乳肉を押し出して密閉状態を造りだす。だれもが自分の胸の中で雄の体液を感じたがっていた。

彼女たちの期待に包まれ、ルードの海綿体は沸騰とともに熱液を噴き出した。

どびゅんっ！ びゆるるるっ、どぶっ！ びゅううーッ！

解放感と炸裂感が肉の溶けるような快感に変わって尿道から竿肉全体に——そして脊髄を通して脳を打った。

気持ちいい、という信号が、苦しい、という信号を塗り潰す。

「あああッ、はうううッ！ たくさん出るっ、出るううう！」

童貞のときのように鳴き狂う自分に酩酊しているのかもしれない。六つの魅乳に翻弄されてヨダレを垂らし、放出感に腰をガクガクと揺らす。

大量の肉汁は三人の乳間へと瞬く間に広がり、彼女たちにも至福の熱感を与えた。

「んっ、んっ、あはっ！ いじめられてこんなにくくさん出すなんて、ルードはやっぱり

受け身になつても可愛い従僕だわ」

「やんつ、ほんま延々ドピュドピュ出とるわあ……こんな一晚中出されまくつて、ウチもよう失神せんかったなあ」

「ああ……ルード様の子種、久しぶりにたくさん……ああ、ルード様ルード様あ」

乳間に収まりきらない分は噴水となつて真上に噴き出すか、下にこぼれて三人の柔腹を汚した。汗ばんだ媚肌にも白っぽい轍が刻まれる。

最初に舌を伸ばしたのはノア。薄弱な視力ですこしでも白い噴水を目にしようと顔をぐつと近づけ、いとおしげに精子を啜りとる。口から糸が垂れてもおかまいなしに、一週間ぶりの苦味を味わっていた。

わずかに遅れてヘルダとシャリーも精子を舐めとつて、うつとりと目を細めた。

もしかすると、黒竜の体液には薬効や媚薬効果ばかりでなく依存性まであるのかもしれない。

「みんな本当にザーメン好きだなあ」

女たちが雄汁の虜になつていくのを見るうち、にわかには蘇った過去の弱気が消え去つていく。攻撃的な欲求が首をもたげてきた。

そのとき、結界が唐突に波打つてふたりの侵入者を迎え入れた。

「ほほ、真つ昼間からお盛んじゃのう」

「まったく、この股間盛りの変態ドラゴンは……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)

全国書店で
好評
発売中



「当方Mドレイ希望」

魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

不死の吸血姫がDSのご主人様を募集
しているようです
「小説・酒井仁 / 挿絵・にのこ」

魔海少女ルルイエ・ルル

「小説・羽沢向 / 挿絵・ピエール☆よしお」

全国書店で
好評
発売中



「魔法の天使ルルイエ・ルル」

地球の未来はルルにおまかせよっ☆

借金お嬢クリス3
令嬢はいかにして42兆円を返済したか?
「小説・筑摩十幸 / 挿絵・了藤誠仁」



全国書店で
好評
発売中

クリス、悪魔堕ち!?

「愛するジグレット様のため、死んでもらいますわっ!」



既刊LINEUP

● 全国書店で好評発売中

● 仙獣学園戦 / ノナガリ ①~③

● 青春期なアダム ①~②

● 純麗 / 帝都少女探偵団 赤い迷路を撃て!

● 借金お嬢クリス ①~②

● フリンセスリバーシ! 交錯する美姫と魔姫

● BLANGEL. 輪になって語る悪者の夜

● 無敵の姫騎士がMMに目覚めたようです

● ビルクリムメイデン ①~②

● 呪詛喰らい部【カースイーター】

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございませう。お問い合わせはメールでもお手数ですが再度お問い合わせください。
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!